

文化庁助成 江戸糸あやつり人形結城座 人形遣い体験育成入門事業

平成 23 年度

結城座 江戸糸あやつり人形遣い 入門塾

報告書



結城座人形遣い体験育成事業（結城座入門塾）開講にあたって

江戸時代には、江戸を中心にたくさんの糸あやつり人形があったようである。その多くは少人数で一座を組み、それぞれの芸を磨きながら江戸を中心として活動していたようだが、何らかの理由で日本から糸あやつり人形は消えて行き、江戸に生まれて江戸で育った結城座だけが残った。この事は私達にとって大きな誇りであり、一方では大きな責任を背負っているとも言える。

それは、より良い後継者を育てて行かない限り日本の糸あやつりという貴重な文化が消滅するという事と、同時に、海外の高い評価に比べて日本人自身がこの日本人独特の「もの」へのこだわり方、独特の表現方法である糸あやつり人形の存在さえ知らないという現状を考えなければならないという事である。

結城座は伝統芸能の人材確保に積極的に取り組む事と、より多くの人達に日本の知恵および感性を実体験してもらいたいと考え、平成16年より結城座の稽古場での入門塾も含め、様々な形で育成体験事業を地道に続けて来た。

そして平成23年度、文化庁の助成を得て小金井の稽古場にて、平成23年7月より江戸糸あやつり人形遣い入門塾を開講し、今年1月に7ヶ月間のカリキュラムを無事修了することが出来た。

古典芸能の一つである江戸糸あやつり人形を学ぶには、当然古典一般の知識が必要とされる。そのため私達の活動に御賛同下さった各界の実力者の方々に講師として参加頂き、基礎的な古典演劇の知識を学ぶ機会を持ち、人形実技との相乗効果を得る事が出来た。

今回は7ヶ月という短い期間ではあったが、各界の皆様のご協力もあり、内容の濃い充実した時間を持つ事が出来た。今後も更に人形遣いになりたいと希望する人も含め、一般の方々にもより広く日本の文化、伝統を伝えていく機会を持たねばならないと心より痛感している。



目次

結城座人形遣い体験育成事業 開講にあたって	1
全体の講義概要	3
人形実技（結城座人形遣い一同）	4～8
日本舞踊（西川鯉之祐先生 西川貴美子先生）	9
古典の台詞（市川笑三郎先生）	10
鳴物（田中傳次郎先生）	11
殺陣（栗原直樹先生）	12
演劇史（渡辺保先生）	13
芝居の作り方（加藤直先生）	14
受講生のアンケートより	15
人形実技の講義を終えて（結城孫三郎 結城千恵）	16
最後に	17

全体の講義概要

●実施期間 平成23年7月～平成24年1月

●授業日 月・水・土曜日

(人形実技2時間＝1コマ その他の特別講義90分＝1コマ)

●参加者数 13名 (女性11名 男性2名／20代3名 30代1名

40代2名 50代4名 60代2名 70代1名)

●講座一覧

科目	講師	授業数
人形実技 (実習を含む)	結城座人形遣い一同	62コマ (124時間)
日本舞踊	西川右近 西川鯉之祐 西川貴美子	10コマ (15時間)
古典の台詞	市川笑三郎	5コマ (7.5時間)
鳴物	田中傳次郎	4コマ (6時間)
殺陣	栗原直樹	2コマ (3時間)
演劇史	渡辺保	2コマ (3時間)
芝居の作り方	加藤直	2コマ (3時間)

●実習

平成23年8月9日 「結城座スタジオ古典公演」 (於 結城座稽古場) 観劇 裏方

平成23年11月 「乱歩・白昼夢」 (於 渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール)

稽古見学 出演 裏方

平成24年1月 「結城座古典公演」 (於 江戸東京博物館大ホール)

観劇 裏方

平成24年1月 「成果発表会」 (於 結城座稽古場)

人形実技 (62コマ)

講師：結城座人形遣い一同

●開講式

まず座長の結城孫三郎の挨拶はじめ塾生を含めた自己紹介のあと、結城座の歴史や江戸系あやつり人形の仕組みや、何処にどのような糸がついているかを解説。そして日本の正しいお辞儀の仕方を教わり、「よろしくお願い致します」と始まりの挨拶をして、いよいよ実技の授業が始まる。

はじめに人形を持たずにテーマに添って歩いて見ることから開始。それから一人一人の身長に合った糸の長さの人形を受け取り、操作盤である手板（日本独自の仕組みがある）の持ち方と使い手の姿勢、立ち方などを教わる。そして人形の足の裏を感じながら（これは非常に難しい）しっかりと立たせる。次に四角い手板に組み込まれているたたらいという棒につながっている膝の糸を下に引いたり上げたりして、人形に足踏みをさせる稽古をする。そして最後に人形掛けに正しく人形を掛け、「ありがとうございました」と挨拶をして初日を終了した。



まず人形を持たずに歩いてみる



手板（操作盤）を水平にして人形をしっかりと立たせる

●7月～8月〈足踏み、様々な糸の付いている場所を覚える〉

手板を水平に持ち、人形を丁度良い高さにキープしての足踏みを徹底して稽古する。人形は浮いてしまったり反対に低くなってしまったり、高さを一定に保つのが大変難しい。又、手板が水平でないと人形が傾いてしまい操作が上手くできない。そのことを注意しつつ、ある程度続けた上で、次に足踏みで前進する。また自分を中心に円や八の字を描くように動かしたり、互いにぶつからない様にすれ違ったり、時には歌を楽しく、又は悲しい心持ちで歌いながらなど、いろいろなバリエーションで足踏みの稽古をする。

また並行して、手板のどこに何の糸が付いているのか、どのようにその糸を使うのか少しずつ確認しつつ覚えて行く。



足と足を紐でつなげて7人8脚

●スタジオ古典公演〈観劇 裏方〉（於 結城座稽古場 8月27日、28日、9月3日、4日）

結城座が吉祥寺から小金井市に移転後16年目にして初めての稽古場でのスタジオ公演（立足場と平舞台、二つの形式の人形舞台上演）。今回の塾生は、結城座公演を観劇した事がなく、初めての体験となる。観劇だけではなく、座員と共に会場内の客席準備、開場の際の誘導などを行い、又終演後の茶話会にも参加してお客様とも歓談する。芝居づくりの側面的な部分も体験する事が出来た。



「寿獅子」(平舞台)
(十二代目結城孫三郎)

憧れの結城座の半纏を着て



「千人塚」(立足場)

●9月～10月〈小走り、その他の糸の操作〉

9月に新たな塾生が入塾、共に稽古に参加。

今までの稽古をさらいつつ、次の段階の稽古に入る。

少し早い速度で前進、そして小走り、駆け足をする。どうしても人形使いと人形との関係が崩れてしまい、なかなか上手くいかないが、皆必死で取り組んだ。又顔を横へ動かす糸、あごを出したり引っ込めたりする糸の操作。これらの糸が使える様になると表現がかなり豊かになるのだが、これは手板を持っている左手で操作しなければならない糸で大変難しく、日常では使わない筋肉を使うので、毎回ゆっくりと辛抱強く続けていく。10月に入ってから「乱歩白昼夢」の公演参加に向けての稽古を少しずつ授業に組み入れていった。



段を登ったり降ったり

●「乱歩・白昼夢」公演〈稽古見学 出演 裏方〉（於 渋谷区文化総合センター大和田 伝承ホール 11月7日、8日）

2009年初演直後から再演を望む声が非常に多かったこの演目の上演が2年ぶりに実現した。その最後のクライマックスシーンの一部分、関東大震災で逃げ惑う群集として、今年度の塾生たちが特別参加をした。稽古場での「乱歩・白昼夢」の稽古を見学し、自分たちのシーンではそれぞれの本番用の人形を使って稽古に加わる。劇場では稽古場とは全く勝手が違い、それでも各々が自分のアドリブの言葉を発しつつ懸命に人形を遣った。

これでスタジオ古典公演に続き、新作公演に触れることが出来、結城座の古典と新作という二つの顔を見ることが出来た。



「乱歩・白昼夢」群集シーン稽古



「乱歩・白昼夢」座員と共にカーテンコール

●「結城座古典公演」〈観劇 裏方〉（於 江戸東京博物館大ホール 1月14日、15日）

江戸時代からの舞台形式である本足場を使った古典公演「人情文七元結」を観劇。

●11月～1月〈歩く、座る、会話するなど表現のバリエーションを広げる〉

乱歩の公演後、肩の力は当初より少しずつ抜けてきたものの、反対にそれぞれの癖が出てきた為、丁寧にフォームや使い方の洗い直しをする。

その後稽古は更にステップアップして、足踏みから歩くという段階に少しずつ近づけていく。一步一步足を出して引きつける、又出すという状態を繰り返し、又例えば方向を指し示す、振り返るなどの動きの際に必ず頭（かしら）の動きを先行させるなど一つ一つの操作を、人形の意思をしっかりと持たせて使うことを学んでゆく。人形の重心を意識し片足で跳ぶ、片膝をつく、正座をする。又更に演じるという事を意識して、歩いて来て片膝をつき、何かを相手に伝え、それに相手は何らかの反応を示すなど、一連の動作としての流れを作り相手との関係も意識しての稽古に発展させて行った。



正座をする



足を出して引き付ける

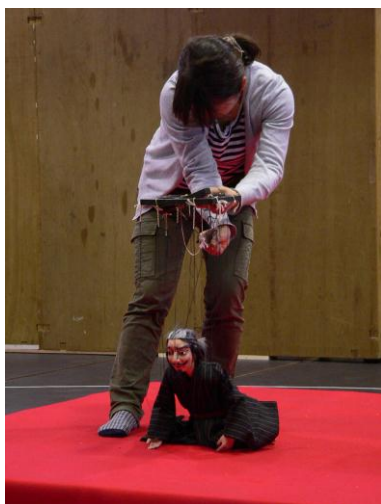


片膝をつく

●成果発表会・修了式（於 結城座稽古場）

いよいよ最終日、一人ずつの成果発表をおこなう。

袖から歩いて来て所作台に上がり、座ってお辞儀をして口上を述べる。そして立ち上がり反対側の袖に入る。単純な様だが人形の場合これだけの動きを行うだけでも初心者にとっては大変なことである。いつもの稽古と違い一人ずつの発表に緊張して四苦八苦していたが、全員がそれなりの成果を発表する事が出来た。



右手で三本の糸を同時に使いお辞儀。手の糸、頭の糸も使って口上を述べる。



座長・12代目結城
孫三郎より修了証
を授与



塾生より感謝の花束



発表会終了後のパーティー。人形の難しさや面白さについて
座員と共に語り合う。

特別講義 日本舞踊（10コマ）

講師：西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生

● 講義を終えて

人形を扱う為に必要な様々な要素のひとつとして日本舞踊を学んで頂きました。立ち座りやお辞儀、摺り足の仕方などの所作の基本は勿論のことですが、演じる役が「男なのか女なのか」「若いのか中年なのか」等の違いによって、「気持ちの入れ方」「体のつかい方」「間のとり方」がどのように変わるのかということを、会得まではいかなくとも、踊りのお稽古を通じて感じ取って貰えたのではないかと思います。人形を扱う為に活かせるものを意識しながらお稽古を続け、この体験をもとに表現を深めて下さい。（西川鯉之祐）

● 講義概要

着物の着方・扇子の扱い・摺り足・立ち座り・正座・お辞儀の仕方から始め、女の踊りとして「梅にも春」男の踊りとして「寿」を指導して頂いた。

- 第一回 着物の着方・所作の基本・扇子の扱いを学ぶ 「梅にも春」
- 第二回 摺り足・首振り・向きの変え方・おすべりを丁寧に復習 「梅にも春」
- 第三回 止まり方・立ち座り・向きの変え方・扇子の扱い・お辞儀の仕方を復習 「梅にも春」
- 第四回 姿勢・摺り足・首振り・回り方を丁寧に復習 「梅にも春」
- 第五回 「梅にも春」
- 第六回 男おどりの基本を学ぶ 「寿」
- 第七回 要返し・足の割り方・座り方を丁寧に復習 「寿」「梅にも春」
- 第八回 要返し・足の割り方・首振りを復習 「寿」「梅にも春」
- 第九回 「梅にも春」「寿」
- 第十回 「梅にも春」「寿」 おさらい 細かく形・手順を追いながら復習



特別講義 古典の台詞（5コマ）

講師：市川笑三郎 先生

●講義を終えて

歌舞伎のセリフをテーマに、古典のセリフ術を体験して頂きました。五回という短い期間でそれを全て伝えることは出来ませんが、皆さんが思い描いている「歌舞伎のセリフのイメージ」と「実際の役者のセリフ術」がどのように異なるのか、そして古典のセリフのリズム・口調の美しさを受け取って頂けたと思います。少ないながらも、五回の講義を重ねるうちに「声の出具合」が確実に変わってきています。うわべだけの「らしさ」を真似るのではなく、講義で取り上げた「歌舞伎のセリフの特徴」を意識しながら、根本に近づくような方向で今後も挑戦して下さい。また、この講義を思い出しながら実際にお芝居を見る事で、更に理解が深まり、面白さも増すことと思います。（市川笑三郎）

● 講義概要

歌舞伎のセリフの特徴を以下の通りに整理。

①七五調の言葉 ②言葉の母音となる生み字を唄うように言う ③独特なイントネーションを付けて盛り上げる ④鼻濁音に気をつける ⑤様式（音楽的）の中にリアルな心理を込める

これらを意識しながら各回のテーマに挑戦する。

第一回 歌舞伎十八番の内「毛抜」より

歌舞伎の古典作品の中に潜む現代性、現代に共通する点を探りつつ、歌舞伎の台詞廻しを体験する。

第二回 義経千本桜「椎の木」より

歌舞伎の丸本物の世話物から、会話に見る喜怒哀楽を取り上げて、歌舞伎の台詞廻しを用いてキャラクターの演じ分けと感情移入を学ぶ。

第三回 猿之助四十八撰の内「加賀見山再岩藤」より

善悪の子の聞き合いを用いて、歌舞伎の台詞術にあるリズム感を体験する。

第四回 伽羅先代萩「御殿」より

義太夫狂言の名作「伽羅先代萩」の御殿の場より、台詞と義太夫の三味線に乗せた掛け合いの「ノリ台詞術」を用いて、音楽的に台詞を唄いながら感情を乗せる術を学ぶ。

第五回 復習と総まとめ



特別講義 鳴物（4コマ）

講師：田中傳次郎 先生

●講義を終えて

私が結城座さんにご縁を頂きましたのは歌舞伎役者・澤村藤十郎さんのご紹介でした。藤十郎さんには修行時代に変にお世話になり、まだまだ小僧でした私に声をかけて下さったり、舞台もご一緒させていただいておりました。そして数年前に藤十郎さん自ら私にお電話をいただき「結城座というところに黒御簾音楽の指導に行ってくれないか？皆さんとても熱心なので大太鼓が打てるぐらいによろしく！」と...

すぐに事務所の方と連絡をとり、車に大太鼓を積んでお稽古場まで参りました。歌舞伎の音楽は通の方でも中々理解がなく、特に大太鼓の自然描写の音は難しいところです。結城座さんの方々も初めて見る世界に大変興味を持っていただきました。もちろん最初は撥さばきや独特なリズムに苦しまれていましたが、まさに芸は“一日一歩”で最後は水の音や雨の音など上達されました。私どもの歌舞伎囃子は太太鼓や楽器で情景や心理を表し、また結城座さんは人形で表す。異なる世界ですが“表現をする”という共通点を稽古を通して見つけたと思っております。

私も伝統芸能の中に身を置く人間の一人として、芸の“伝承”だけではなく“発展”ということを考えております。多くの方々に話をきいていただいたり、楽器に触れていただき、そして興味を持っていただくことが大切だと思っております。結城座さんの活動はこれからも続けていただき、大きな輪となり古典を愛する方々が増えるよう願っております。（田中傳次郎）

●講義概要

はじめに、歌舞伎音楽とはどういうものか、どのような楽器を使用するのかなど、色々なバチも見せていただいて学ぶ。大太鼓を実際に使って「一番太鼓」「着倒」「シャ切」「打出し」「波音」「水音」を解説つきで打っていただいた。塾生は大太鼓の迫力に圧倒されつつも、今まで何気なく聞いていた歌舞伎の音楽の解説に興味深く聞いていた。最後に長バチを一人ずつもち、儀式音楽として「着倒」の“ドン・ドン・ドントコイ”や「打出し」の“デテケ”、自然描写として「水音」「波音」「風音」「雨音」「雷」など色々な音の稽古。それらを組み合わせてみたり速さを変えてみたり、芝居に合わせて打ち方を工夫したり、打つ姿の美しさや心構えについても学ぶ。塾生は慣れないバチの扱いに苦労しつつも、先生の丁寧な指導を受け、歌舞伎音楽への理解を深めることができた。



特別講義 殺陣（2コマ）

講師：栗原直樹 先生

●講義を終えて

今回は芝居の殺陣の基本的な稽古を致しました。私もこれまで何度か結城座の芝居の殺陣を担当させていただきましたが、人形には、人間の芝居では出来ない、独特の迫力のある立ち回り表現を可能にする力があると感じます。そもそも日本の武道は必要のない筋肉は極力使わない、腰を安定させて脱力することが基本です。そのことは人形を操ることに繋がる部分があるように思えます。これから稽古が進み、私の授業が何か役に立つ事があれば大変嬉しく思います。（栗原直樹）

●講義概要

侍の所作（歩き方、おじぎの仕方など）、刀の差し方・抜き方・握り方、色々な構え、簡単な立ち回りまで学ぶ。「歩く際は腰の位置を変えず、足からではなく丹田から動く。出す足のつま先はまっすぐ。後ろ足のかかとが浮かないように。かかとの上に膝があることを意識する」「刀を下げる時は雑巾をしぼるように手をひねって止める」殺陣では怪我をしないように「相手から刀の長さが分かるように構える」「切った際に相手とバスケットボール1個分距離をおくようにする」「振り返る際、まわりに当たらないよう、刀は横に振らない」など分かり易く言葉で説明していただきながら、“武道”とは異なる“芝居でみせるための殺陣”を、実際に木刀を手を持ち学んだ。



特別講義 演劇史 (2コマ)

講師：渡辺保 先生

●講義を終えて

今回は江戸糸あやつり人形入門塾という事で、まず1日目には、日本の5つの古典劇（能、狂言、文楽、歌舞伎、糸あやつり）のあらましと、その共通する何点かの独自性、又その様な特色を持つに至った理由などについて、2日目には、日本の人形芝居の成り立ちと近世以降、浄瑠璃と合体して独自の形に発展していった過程などについてお話し致しました。最後に特に私がお伝えしたかったことは、操り人形というものが単に人間らしく動くことが第一目標ではなく、人間では出来ない、人形だからこそ出来る表現、つまり役の底にある深いところを、純粋に表現する力を持っているという事です。その事を心に置き、今後もぜひ人形のお稽古に精進して下さい。(渡辺保)

●講義概要

第一回

日本の古典劇5種（狂言、能、文楽、歌舞伎、糸あやつり人形）とその特徴について学ぶ。古典劇の特徴は ①それぞれが特殊な舞台様式を持っている。②叙事詩である。③仮面劇である（狂言→無表情、歌舞伎→厚化粧）④全て女人禁制⑤芸という方法論を持っている、ということが上げられる。実は近代以前には、世界中の演劇が同じ特徴を持っていた。(シェイクスピア、クーリヤッタム、ギリシャ悲劇など)

参考DVDとして 能「通小町」文楽「義経千本桜」（椎の木の段、すし屋の段）歌舞伎「助六由縁江戸桜」を見る

第二回

日本における人形劇の発展について学ぶ。日本の古典劇の中で一番古い物といえる人形芝居は、安土桃山時代に始まる。中国から渡った「傀儡回し」が元で、指人形→棒人形→手あやつり、糸あやつりと発展し人形劇が定着した。

名優の芸について呼吸が大事であることを学ぶ。名優はその場の人の呼吸を一つにできる。観客皆が持っている心の糸の先を束ねて持っており、その糸に乗せて言いたい事を伝える。糸の配給をどうおこなうかが名優の技である。

参考DVDとして「菅原伝授手習鑑」（吉田玉男出演）を見る

演劇表現は飛び越えなければならないハードルが高いほど、強く意思を表すことができる。だから日本の古典劇はハードル（化粧、仮面等）をひいたのである。その中でも人形は人間ドラマでは到達できない様式の統一があり、人間では表現できない純粋な気持ちを観客に伝えることができる。



特別講義 芝居の作り方 (2コマ)

講師：加藤直 先生

●講義を終えて

演劇のこれからと結城座

演劇表現そして劇場とはそもそも何でその楽しみはどこにあるのか？という設問を前提に講義をすることになりました。いやむしろ一緒に考えてみよう。

表現が見えない世界を見ようとする行為であるとするなら現実と夢・日常と非日常等の関係を想像しながらそれらの境界について結城座の「人形を操る側と人形」の関係から導き出してみようとした訳です。

結城座の人形のモノでありフィクションであり操られる存在のくせに頑固に主張する実在性は一体どこにその根拠があるのでしょうか？モノと情報を所有し消費する流通システムに何も彼も組み込まれつつあるデジタルなこの世界で伝統と前衛性を「芸」を介在して具体的に展開しようとする結城座の存在は僕らの演劇の現在を——演技論の不在・観客論の不在等——批判し挑発し続けるはずです。(加藤直)

●講義概要

表現とは何か、表現には他者が必ず必要であるという話から始まり、劇場の変遷、芝居の起源、芝居の見方など、いろいろな話を伺う。表現の四要素として「言葉（分かる・分からせようとする手段になってしまう問題を含む）」「音楽（感覚的で言葉と対局にあるもの）」「身体（今ここにあること）」「声（今ここにあること）」を挙げ、四要素による表現と観客の様々な対話がある「劇場」というしくみを学ぶ。授業の後半では、結城座の人形とは何か？という話になり、人形は“決してリアルにならず、観客の想像力をかきたてる存在”として、“言葉言葉の演劇（身体・声の消失）”になりつつある現代演劇への批判なのだ、と伺った。最後の結城座とは何かという講義にあたり、塾生は自分たちの遣う「人形」について改めて考える機会になった。



受講生のアンケートより

全体の回数、授業の曜日・時間帯などについて

- 社会人や学生の立場からすれば、適切な時間帯であったと思う。(20代男性)
- 週3回は結構大変でしたが、夜である事は出席しやすかったです。このくらい集中してお稽古しなければ出来ないとわかった7ヶ月でした。(50代女性)
- 週に3回はなかなか通えないと思うときもありました。平日1日と土曜など、週2日だったら通いやすいと思います。(50代女性)

人形実技の進め方、講義内容について

- 習熟度に合わせて進めて頂いたので、私にはありがたい事でした。(20代男性)
- 内容が濃く、ついていくのに大変だった。迷っているときちゃんと教えてもらえるのが助かりました。(60代女性)
- 舞台の手伝いや本番に出させていただいたので、充実していたと思います。(20代女性)

外部講師による特別講座について

- 私のように、普段伝統芸能に触れることのない者からすれば、操り人形以外のことを知る良い機会であったと思います。(20代男性)
- とてもすばらしかったです。和の心地よさに目を開かされました。(50代女性)
- 江戸糸あやつり人形がセリフを云いながらあやつる人形ということでセリフや日舞・殺陣の授業は大変勉強になりました。(40代女性)

入門塾全体について

- 聞いてみないとわからない、見てみないと、触れてみないとわからないと思う事がまだまだたくさんあるのだとあらためて思いました。本当に言葉に尽くせない程幸せな時間でした。もっともっと若い頃から体験したら良かったと…(50代女性)
- プロの姿勢というものも学ばせて頂きました。(50代女性)
- 途中で続けていこうか迷いましたが、最後まで続けてよかったです。厳しい指導をうけたときはへこみましたが、結局は自分の身になっていました。(20代女性)
- あやつり人形をもっと大勢の方達に知ってもらえる様、微力ながら私も応援したいと思います。(70代女性)
- スタート直後はこのように難しいことを始めてしまったことを後悔しました。しかし何回か通ううちに、糸あやつりによって人形が動く、座る、あごを出したり引っこめたりする糸で表情が出る、自分でやってみるととても難しいのですが、先生方の人形遣いに少しずつ魅了されていきました。公演への参加・見学は、入門塾を受講していたからこそ、人形の動きや先生方の手の動き等、しっかりと見て味わい楽しむことができたように思います。(50代女性)

人形実技の講義を終えて

初めは、手板（操作板）の持ち方から始まり、足踏みをする。20分ほど動かしては、5分から10分の休憩を取り、また手板を持つという繰り返しであった。この状況下でも大半の人が、腕や肩の痛みを言ってきた。これは、普段使わない筋肉を使用することもあるが、肩に力が入り、リキミが出ていることが大きな原因であった。脱力を課題に、授業は進行していったが、この「脱力」の行為は、中々簡単なことではなく、生徒たちは全員苦戦していた。現実には、3,4年かかる所を7ヶ月という期間内でやらせたのだから、生徒たちにとっては、かなりハードな行為であったと思う。人形芝居とまでは行かなかったが、まだまだ何が何だか分からない状態の中で、彼らを本当の舞台に上げることにした。結城座公演「乱歩・白昼夢」の最後のシーンで関東大震災の最中を逃げ惑う民衆であったが、演じる事とは一味違った彼らの必死さがなかなかの評判を頂き、嬉しい誤算であった。そのような経験を経て、最後に卒業課題を口上という形で人形に言わせて修了とした。最も重要な、芝居を通して人形を遣うという最大の授業は、半年では余りにも日数が足りず大きな課題として残った。

糸あやつり人形を広く一般の人に教えるという講師の立場で、生徒たち一人ひとりが真摯に人形に立ち向かう姿に、静かな感動を覚えたのは私一人ではあるまい。日本の糸あやつり文化は確実に裾野を広げつつあると、確かな手応えを感じた修了日であった。

十二代目 結城孫三郎

一般的に糸あやつり人形を知る人は多くはないのではないと思う。ましてや、江戸糸あやつり人形と正式に呼ばれるとなんとなく気後れしてしまうのではないだろうか。そんな中で、入門塾に一步踏み込んでくれた人たちの勇氣なりエネルギーなりを私たちは一番尊重したいと考えている。尊重と言うのは本気で教えるという意味につながっていく。彼らは恐る恐る人形に触れるものの、次第に指、腕、肩、腰、足などの痛み（日常の筋肉の使い方と違うため）と動かない人形または動かせない自分自身に対して苛立ちを覚えていくようだ。しかしその中で今まで何気なく過してきた自分自身の肉体を考えるようになり、日常の会話や喜怒哀楽などを改めて客観的に考えるようになるのだ。その頃になると恥やら照れなど忘れて人形としっかり向かい合うことができ始める。この状態になるまで半年は要したであろうか。彼らにとってはここからが本当の人形との格闘である。私自身は一見無駄に思えるこれらの時間が大変彼らにとって重要なものであったと確信している。一日一日が発見の連続であったと思うし、この小さな人形の表現に四百年近くもこだわり続けてきた日本人の『物に対するこだわり』のありかたを知らず知らずのうちに体験し、自分の内にある日本人の物の考え方に気づくきっかけにもなったようだ。人形を遣うことは器用さとか運動神経とは関係なく日々の稽古の積み重ねと自由な発想を持つことである。入門塾を経験して彼らが少しでも思い込みから解放されることができるようになってくれたらと心より願う。最後に今期の塾生たちは非常に真面目な方々であったことをありがたく思っております。

結城千恵

最後に

この7ヶ月を通して生まれて初めて人形を手にした塾生の変化は、彼ら自身が実感している以上のものであった。人形の足の裏を感じろと毎回言われ続け、知らぬ間に必死に感じ取ろうとする。感じる日もあれば分からぬ日もある。しかし文字で書くともでもない事のようなが、人間の六感を磨くという意味であると思うと非常に難しい要求なのだ。我々の要求に必死で応えようとするうちに不思議と体感出来る時がある。人形に限らず物を使って何かを表現しようとする時、最も必要なことは眠っている六感を目覚めさせる事だと思う。喉に問題を抱え大きな声が出せないと思っていた人が、知らぬうちに序々に声が出て来る。腹から声を出す事、身体のあらゆる所に共鳴させる事などを体得していたのだ。何よりも自我を忘れ失敗を恐れなくなり、辛い事をも楽しめるようになった事が大きい。私達は彼等が開かれていく状態を見ることが何よりも嬉しく、教える苦勞を忘れることが出来た。しかしもう一歩すすめてあげたいと心から思う。結城座は人形遣いが台詞を言い始めて100年を悠に超えている。現在我々にとって台詞を言いながら人形を遣うことは当たり前の事となっているが、人形を始めて遣う人にとっては二重の重みを感じるようだ。しかしあやつる事と、台詞を言う事を総合して初めて結城座の江戸あやつり人形芝居は成り立つ。そこ迄一歩でも立ち入らせてあげる事が出来れば、本当の意味で卒業させる事に繋がるだろう。その道は遠いのか近いのかは分からぬが、我々は今後も希望を持って進み続けたいと考えている。

結城座





主催：公益財団法人 江戸糸あやつり人形 結城座
国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」 「東京都無形文化財」

〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 3-18-2

TEL 042-322-9750

FAX 042-322-3976

Email info@youkiza.jp

<http://www.youkiza.jp/>

助成：文化庁 

印刷：社会福祉法人 東村山けやき会 平成の里

結城産

